

今日の青少年の意識

と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

佐藤雅晴

目次

はじめに

今日の青少年の意識と特質

* 青少年文化（ユース・カルチャー）の成立

* 青少年文化の特質

* 青少年文化を支えるもの

なぜ少年期（子弟初期）教育は必要か

* 生涯学習よりの視点

* 少年期（子弟初期）の重要性

* 少年期（子弟初期）における発達課題

智山派における寺院子弟初期教育

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

* 寺院子弟講習会に至るまでの経過

* 寺院子弟講習会の状況

寺院子弟講習会の展望

* 寺院子弟初期講習会の在り方についての一考察

* 檀信徒子弟講習会への展望

まとめ

はじめに

子供達と接して一緒に生活していると、子供は変わってしまったのだろうか、と時々思うことがある。

昔は「子供は風の子」といわれ、純心で活発に飛びはね、風のように爽やかで決して一箇所にたたずむことなく、絶えず仲間を求め、遊びを求めることがなく、自由闊達に過ごしていた。

だが、今の子供達を見ていると、不器用で、何やら大人びていて、分別くさく、ひ弱で、時には肥満で、鈍重な印象を受ける。その姿は子供は確実に変わりつつあることを印象づける。

また、かつては子供は大人という人格を通して知識や文化、技能や生活習慣を習得し吸収して育つ事を常としていた。小さな子供達は大人にまとわりつき、しきりに物を尋ね、父母や兄姉も子供の求めに応じ、疑問を丁寧に説き明し教えた。子供はこうした先輩の人格を通じて知識や伝承文化を受け継ぎ社会へと旅立つていった。

しかし、経済成長に伴う技術革新、とりわけマスメディアの発達は大人から子供へという知識習得の形態を一変さ

せ、経済優先の生活は家庭での教育力の低下をもたらし、慎重に大人の世界と子供の世界を区別しながらも紛を保つていた時代は過去のものとなり、その事は青少年の成長のための発達課題を失わせる結果となつてきている。本編では、単に青少年文化を感覚的にとらえるだけではなく、生涯教育の側面から青少年、特に少年期の子供達の意識と特徴を探り、少年期（子弟初期）教育の在り方について考察したい。

今日の青少年の意識と特質

* 青少年文化（ユース・カルチャー）

今の三年は江戸時代の五十年に匹敵するという学者もいる。十年一昔というが、現在の十年の時間的距離はかなり大きい。そんな中で青少年の意識と特質はどのように変化しているのだろうか。

昭和四十年代に入り、経済の高度成長並びに社会システムの合理化・無機質化は青少年に大きな影響をあたえた。学園闘争、ヒッピー、フォーク、反戦等の運動や闘争は非常に盛り上がりを見せ、それまでの成人文化からの独立へと進展し、ユース・カルチャー（青少年文化）の成立へと続いた。

高度経済成長は全国規模での急激かつ大幅な都市化を進行させ、あたかも、日本全体が一つの都市であるかのようないくつかの都市社会を成立させ、その成立は旧来の家を中心とする家族形態の終焉と、第一次産業を基盤とする経済構造の変質をもたらした。それまでの家族と地域社会は、人間体験の場、社会体験の場であり、人が社会化していくうえでの原点と見なされていた考え方もほぼ崩壊した。この事は「たて型文化」である家郷の喪失、文化の喪失を意味し、青少年は旧来の家族や地域社会とは無縁の存在となつた。しかし、青少年は社会制度の崩壊にはほとんど関心を示さず、むしろ進んで背をむけ、画一的な人間を期待する都市化社会（現代社会）に積極的に組み込まれていった。

経済の高度成長は青少年の家郷から都市化社会への離脱を可能にした。

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

* 青少年文化の特質

それでは、青少年文化の特質とは何か。その幾つかを拾い上げてみる。

①、アイデンティティの未成熟性

現代の青少年はモラトリアム延長の中で生活していることはあらためていうまでもない。モラトリアムとは青少年が成人としての自我あるいは自己のアイデンティティ（自己同一性）を形成するまでの猶予期間をいうが、青年はそのモラトリアム期間を延長し続けている。また現代社会にもそれを許そうという風潮もある。青年期とは、結婚し、家庭をつくり、親となる年齢、三十五歳前後位今までを考えるのが一般的となっているが、青年がモラトリアムを延長し享受することは「大人になりたくない大人」の出現を認めさせ、社会的役割の遂行を延期することになり、社会から離脱し、私的生活にしか関心を示さないという世代をつくり、アイデンティティの形成の遅れをもたらす。アイデンティティ未成熟の特徴として幼稚性（子どもっぽさ）、軽躁性（軽やかにぎやかさ）、転身性（移り身の早さ）などを上げることができる。

②、やさしさの表現

青少年文化の特質は青年の「やさしさ」の表現方法にも見られる。モレトリアムは相手が傷ついたり、弱つたりしている時に、相手の回復を待つてあげる猶予の状況を基本としている。つまり、これは平和主義と相手の人権の尊重思想に立脚しており、これが青少年の「やさしさ」という特徴を生み出す。しかし、「やさしさ」は攻撃性、破壊性の抑圧「してはいけない」という学習の積み重ねで維持されていることも見逃すことは出来ない。「やさしさ」のか

げにはつねに攻撃性、破壊性がひそんでおり、過去の学園戦争、いじめ等のように時として爆発的に表現される場合もある。

③、帰属意識の欠如

青少年にとって、社会の構成員であるという意識は非常に薄く、社会生活に対しては常に無関心、無関係を装う。具体的にいえば、国家や社会に対する役割、帰属意識や忠誠心の欠如という形で現われる。青少年にとっては自分の生活の充実が優先することであり、たとえ社会に貢献する 것があつても、自分の生活を犠牲にしてまでも貢献しようとは考えない。役割、帰属意識の欠如は家族、学校、地域社会においても現れ、家族の一員としての自覚、兄弟の一員としての自覚は明確ではない。まして学生であり生徒であることや地域社会の一員であるなどという帰属意識はほとんど無いに等しい。

役割、帰属意識の稀薄さは、ルールやモラルなどの規範の崩壊にもつながり、家庭にあつては父母の意思に従わずに行動や孤立をするとか、あるいは一定のルールが確立していないとか、学校においても教師に従うことではなく、尊敬することもなく、規則を平気で無視することができる。地域社会においても役割、帰属意識を持つよりも、むしろ地域社会から離脱しようとする力が強い。青少年の地域社会におけるモラルの確立は困難な状況にある。

④、私的生活の重視

青少年文化は社会生活よりも私的生活に関心を先行集中させるところに特徴が現れる。私的生活の重視は、社会生活との接触を極力排除し、自分を磨く事のみに意識を専念させる。また、「わたし」もしくは「わたしとあなた」という人間関係の場合が多く、「自己」を磨く、自己を着飾る、オレ流の生き方」を大切にする。表現方法や自己主張には長けているが、集団生活になじめない、協調性のない利己的な青少年を育む結果にもなっている。

青少年文化にはこのような特徴および気質が見られる。しかし、青少年気質及び特徴は後天的に学習、外的要因によつて形づくられるものである。青少年文化を支え育んでいるものを探つてみると次のようになる。

* 青少年文化支えるもの

「今の若いものは……」、という言う言葉は時代が変われば社会体制が変わつても、やはり耳にすることになる言葉の一つであろう。

青少年の文化的特質をあげると、社会への適応よりも先ずは成人文化からの「逸脱」の方が目につく。非行、犯罪、自殺、登校拒否、構内暴力、家庭内暴力、シンナー、マリファナなど、いわゆる社会病理といわれてきたものが頭に浮かぶ。同様に五無主義といわれる無気力、無関心、無責任、無感動、無作法など、その特質を論じられる場合もある。

しかし、これらの特質は、全て「新しい文化形態である」と捕らえ、青少年を考える上でのスタートとしなければ、何の解決方法も見出せないと思われる。

若者は社会生活の中で役割を喪失している。役割の喪失は知力と体験の分離につながつてゐる。役割を取得し遂行しようとすると体験は知識を得ることにつながり、それが知恵となり知力となり、日常生活に潤いを与える。知識は体験にともなつて知力となるが、体験がなければ知力も知恵もないことになる。だが、これらの事が青少年の先天的な特徴並びに気質ではない事は改めて論じる間でもない。

今日では、体験に変わる役割を果たしているのがマス・メディアが提供する情報である。青少年はマス・メディアが情報を提供してくれるがゆえに社会から離脱し、私的生活の中で「孤立」を感じずに生活できる。青少年にとって

マス・メディアはなくてはならない大切ななものであり、心のよりどころであり、信用できるもの、大きな影響を与えるものである。

だが、マス・コミの情報だけではさまざまの問題が生ずる。例えばマスメディアの提供する情報は体験を提供しないし、文脈も順序もない。一方的に詰め込まれるだけである。本来、子供が成長し、豊かな青年期を送り、成人になるためには年齢に応じた順序をふんだんに体験と知識がなければならない。アイデンティティはこのような年齢に応じた体験と知識つまり「発達課題」によって形成される。

体験の場として青少年の受皿となるべき場所はさしあたり家庭、学校、地域社会が考えられる。家庭、学校、地域社会は本来の果たすべき役割をそれぞれの立場であらためて問いかねばならない。青少年が円滑な社会生活を送り、健全に成長するための場づくりを早急に考える必要があると思われる。

なぜ少年期（子弟初期）教育は必要か

* 生涯学習からの視点

平成二年度簡易生命表によると、日本人の平均寿命は、女性が八一・八一歳、男性は七五・八六歳となり、戦後だけでもその寿命は一五～一六年も伸びている。これに加えて飛躍的な科学技術の進歩は私達の人生にゆとりと安らぎと余暇時間の拡大をもたらしてくれた。

しかし、科学技術の進歩、高度経済成長はそれまで身に付けた知識・技術を急速に過去の物としている。学校時代に身に付けた知識・技術だけでは時代の流れについて行けず、円滑な日常生活・社会生活が送れない時代が到来している。

たとえば、コンピューターが発達し、銀行でお金を引き出すのもカード一枚あれば可能となり、地下鉄においても駅員と言葉を交わさず切符を購入し、電車に乗車することが可能になった。だが、その方法を学習しなければたちまち日常生活に不都合を来たし、快適な生活ができなくなる。

このように、社会が変化し、また変化の速度がはやまると、私達は子供の頃の教育で身に付けた知識・技術だけでは生活に不都合を来たす。言い換えれば、私達一人ひとりが、明るい、充実した人生を送ることをめざして「生涯自發的に学ぶ」ことが大切な時代になってきたといえる。

生涯学習は学校教育とは異なり、与えられるものではなく、本来自らの意思によって生涯にわたり自らが努力し獲得していくもの（無意図的教育）であり、それを推進するためには、人の年齢に応じた発達の度合いに合った「自学自習」をめざした「やる気」と「生涯学習能力」を育成することに基盤がある。生涯学習は、各人のやる気をいかに喚起するかにその基本があり、若い時からどのように学び続けるかの意欲を養つて行くことにその目標がある。

最近、大学生の私語の問題が話題にされる。往往にして、勉学のためでは無く、ファッショングのつもりで入学したのではないかという学生もいるといふ。明確な問題意識が欠如していれば、学問に対する積極的な姿勢、やる気は起こってこないのが当然である。また、どのようにやる気があつても、学習能力が欠けていれば学習効果はあがらない。まず、教育の効果を高めるためには主体的に学ぶ態度・能力・意思等の自己教育力をどう身に付けるかということが重要な視点となってくると思われる。

* 少年期（子弟初期）教育の重要性

ルソーはその著書「エミール」の中で「人間の教育は誕生とともにはじまる」と述べている。

「三つ子の魂百まで」というが、子供は可塑性をもつてるので、この時期に身に付けたものは一生忘れず生活化していく。故に、人間発生の初期ほど、教育の効果は大きい。言い換えれば、成人教育よりは学校教育の方が教育効果はあがり、その中にあっても大学や高校よりも中学校や小学校の方が教育効果は著しい。その人が生涯にわたって学ぼうとするか否かは人間形成の初期に形づくられる。

このように、家庭教育の在り方が子供の一生の教育を支配することになるので、家庭での生活は重要である。また、家庭教育においては親が教師の役割を果すこととなる。それ故、子供を学習させようとすれば、まず親が率先して子供に手本を示さなければならない。親が時間を無為に過ごしていれば、子供にも学習に対する自発的・自律的態度は生まれてこない。「子は親を写す鏡である」といわれるよう、家庭は立派な教育機関である事を認識し、子弟教育の一歩を踏み出さなければならぬ。

* 少年期（子弟初期）における発達課題

人は、生涯を通して多くの発達課題を持つている。特に少年期における発達課題はその人が社会化していく過程で最も大切な時期と言える。

成長発達には、①素質（先天的要因）、②環境、③学習、④本人の意志などが深く関わり、各個人が学習しようとする時期（学習適時性）に適切な指導を行うことにより、その課題は達成され、またその学習と体験により蓄積された知力が次の課題への移行を可能にするものと思われる（学習累加性）。

各時期の発達課題をまとめてみると次のようになる。

① 幼児期

この時期は、自我の発達が著しく、何でも自分で行なおうとし、それに伴う失敗体験や成功体験により、「自立」しようとする気持ちが芽生えてくる。

②児童期（小学生期）

この時期は、いろいろなことに興味を持ち、自分の意志で体験してみようと活発に動き回る活動期であり、自分の意志で行わせることにより「活動性」が身に付く。

③思春期（中学生期）

この時期は、「自発性」と「自立性」、そして「自律性」の均衡が求められる。自分で判断し、実行出来るようになり、自らの自由な選択により主体的に物事が決められるようになるが、同時に、人に迷惑をかけない事も期待される。責任、誠実、愛情、信頼などを経験する。

④青年初期（高校生期）

この時期は、独立行動に対し自律性が育成される。自己主張をしながら、自己確立、自己同一性（アイデンティティ）期の初期にあたり、自己をみつめ、自分の道を模索する時期である。また、心身の発達においても各段階には次のような特徴が見られる。

①小学校低学年児

●知的発達の特質

- イ、興味の対象が児童的なものに転換する。
- ロ、言語能力が飛躍的に発達する。
- ハ、抽象的な思考は出来ない。

二、具体物に即した論理操作はある程度出来る。

ホ、物事を直観的に把握する。

●情緒、社会的発達の特質

イ、情緒は安定している。

ロ、基本的生活習慣はある程度確立している。

ハ、対人関係は両親や教師への依存度が高く、友人関係はそれほど緊密ではない。

ミ、二～三人の集団が多く、流動的で孤立児が多いなど集団の安定性は低い。

●身体・運動の発達

イ、身長は緩やかに、体重は急速に増加し、児童体型となる。

ロ、脳細胞は飛躍的に発達する。

ハ、走・跳・投などの運動機能の発達は一様でない。

②小学校高学年児から中学校低学年生

●知的発達の特質

イ、抽象的な思考が出来るようになる。

ロ、言語能力が再び急上昇する。

ハ、文科型、理科型などの興味の分化がややあらわれる。

●情緒、社会的発達の特質

イ、自我意識が発達する。

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

口、情緒的不安が増す。

ハ、道徳観が自立的・動機論的なものへと転換する。

ニ、対人関係は閉鎖的で離合分散をくりかえす。

●身体、運動の発達

イ、身長・体重はともに急上昇する。

ロ、二次性徴の出現が始まり性的発達が急激に進む。

ハ、身体はほぼ成人の割合に達する。

ニ、運動機能はやや停滞的になるが技巧性が増す。

ホ、運動機能の発達に男女差が顕著に出現する。

③中学校高学年生から高校生

●知的発達の特質

イ、抽象的・論理的思考が飛躍的な発達する。

ロ、教科的興味の分化が進み、知的世界が拡大する。

ハ、人生観・世界観などの内面的成熟が深化する。

ニ、進路などについて自主的決定が出来るようになる。

●情緒、社会的発達の特質

イ、自律的価値観・道徳観の形成が進む。

ロ、自己概念を確立する時期であるが、その間情緒的不安が残る。

ハ、対人関係は協力協調の段階に入る。

ニ、両親への情緒的依存から脱却する。

●身体、運動の発達

イ、身体的発達は微増傾向に転じ、やがて停滞、完成する。

ロ、運動機能は成人並みとなる。

人間の発達は、それぞれの発達段階で身に付ける必要のある「発達課題」があるのは、前述した通りである。子弟講習等のプログラム作成にあたっても、これ等の事を基礎として講習カリキュラムの作成をはかる事こそが肝要に思われる。

智山派における寺院子弟初期教育

* 寺院子弟講習会に至るまでの経過

智山教化研究所で実施した教化研究会では、昭和五十七年度「社会問題と教化—青少年のかかえる問題」、五十八年度「社会問題と教化—青少年の教化はいかにあるべきか」、五十九年度「青少年教化をめざして—宗団（總本山）の青少年・児童研修について」と、三年間にわたり青少年問題に焦点を合わせ、子供会やボーイスカウトなど青少年団体活動で直接指導している関係者を対象に研究会を開催した。

その中で、とくに三年次目では、過去二年間で討議された結果である「青少年教化とは、単に檀信徒の子弟を対象とした問題のみにとどまらず、宗団の子弟教育にもつながる問題を内包している」とのまとめを基に、第一分科会「寺族子弟の研修」、第二分科会「檀信徒青少年・児童の研修」の課題を設定し話し合いがなされた。

第一分科会では、

- ・指導者の養成について
- ・宗団内の人とらわれず、講師については宗外からも広く求めた方がよい。
- ・リーダー養成については、段階的、長期展望に立つべきではないか。
- ・リーダーは、全体を見渡す総括的指導者とプログラムの細部を担当する特技指導者の両方を養成するべきである。

二、研修内容・日程・対象

- ・教区→ブロック→本山など段階的カリキュラムが必要である。
- ・日程は一泊二日だと内容が盛り込めないので、二泊三日以上が望ましい。
- ・低年齢（幼児・小学生）、中・高校生など、カリキュラムを考える上で分けるべきだ。

三、効果

- ・低年齢より研修を実施すべきである。（家庭教育や寺庭婦人との係わりから）
- ・高年齢の方がよい（引率の問題から）

第二分科会では

一、宗団が出来る研修の限界

- ・教師研修、リーダー養成など可能である。
- ・マスメディアや電話を効果的に利用すべきである。

二、檀信徒・青少年・児童研修をする上での問題点（教師側から宗団へ）

- 人的（指導者の養成・派遣）、經濟的（助成）など支援組織の確立。

- 教材・教具の整備、関連情報の収集と提供。

- 開催環境（寺院環境）にあつたプログラムの提示、他機関との調整連絡。

- 安全管理や活動傷害保険など外的条件の整備。

三、研修内容

- 人間らしい温かさを育てる。

- 六波羅蜜（アリガトウ・ハイ・ニッコリ・キビキビ・スマセン・オカゲサマデ）。

- 子供達がお互い助けあえること。

- 不殺生戒（いのちの尊厳）

- 研修というより「こちらの解放」、「塾やお稽古」とから解放されるような内容で。

- 公共心、協調性、奉仕活動などの啓蒙。

- 寺院子弟も檀信徒子弟も同じ内容で。

四、対象

- 内容面では寺院子弟と檀信徒子弟を区別しなくてもよい。

- 小学校三年～四年生を対象とする。但し、教化活動全体から見て、幼児の位置付けも考えるべきである。

五、日程

- 一泊二日または二泊三日。

六、右記をふまえての宗団として実施可能な研修会のモデル

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

①会場は総本山とする。

②対象は小学三年生から四年生が望ましい。

③日程は二泊三日では指導者に負担が掛かるので一泊一日ではどうか。

④内容については右記の研修内容とする。

など、具体的な提案がなされた。

この第九回教化研究会の内容を受けて、昭和六十年二月二十六日に小峰一允教学部長より、教化研究所へ「寺院子弟講習会」開始にあたっての計画書提出の依頼があり、同時に第五十次教区代表会において、高野一能宗務總長より寺院子弟講習会を実施するとの説明がなされた。

教化研究所は検討作業を行い、①日時、②場所、③対象、④目的、⑤組織図、⑥今回実施上の留意点、⑦将来への展望などについて「昭和六十年度寺院子弟講習会実施要項（案）」として回答し、実施の運びとなつた。

* 寺院子弟講習会の状況

● 昭和六十年度寺院子弟講習会

①日 時 七月二十九、三十日（一泊二日）

②場 所 総本山智積院

③対 象 寺院子弟（男女不問）で小学四年生から中学三年生

④目 的 総本山に登嶺し、本山の雰囲気に親しみ、宗教的情操を深める。

⑤参加人員 男二十二名、女六名、合計二十八名。（小学生十九名、中学生九名）

⑥講 師 四名。（男 三名、女 一名）

⑦主な内容 開講式、生活オリエンテーション、諸堂参拝、讃仏歌・勤行式指導、討論会、勤行、作務、講義「弘法大師について」、発心式、閉講式。

●昭和六十一年度寺院子弟講習会

①より④までは、前年と同じ。

⑤参加人員 男二十四名、女六名、合計三十名。（小学生二十二名、中学生八名）

⑥講 師 四名。（男 三名、女 一名）

⑦主な内容 生活オリエンテーション、開講式、映画「赤い井戸」、山内参拝、讃仏歌・勤行式指導、座談会、勤行、作務、講義「弘法大師」、発心式、閉講式。

●昭和六十二年度寺院子弟講習会

①日 時 七月二十八日、二十九日、三十日（二泊三日）

②より④までは、前年と同じ。

⑤参加人員 男十七名、女五名、合計二十二名。（小学生十四名、中学生八名）

⑥講 師 五名。（男 四名、女 一名）

⑦主な内容 生活オリエンテーション、日程オリエンテーション、勤行、作務、開講式、法話「両祖大師について」、山内参拝、勤行式解説、讃仏歌指導、ファイヤーストーム、清水寺参拝、発心式、閉講式。

●昭和六十三年度寺院子弟講習会

①から④までは、前年と同じ。

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

⑤参加人員 男十九名、女六名、合計二十五名。（小学生十六名、中学生七名）

⑥講 師 五 名。（男 四名、女 一名）

⑦主な内容 勤行式指導、開講式、生活オリエンテーション、日程オリエンテーション、勤行、作務、講義「寺院、お施餓鬼、六道」、山内巡拝、勤行式の解説、讚仏歌の指導、ファイヤーストーム、清水寺参拝、発心式、閉講式。

●平成元年度寺院子弟講習会

①から④までは、前年と同じ。

⑤参加人員 男十九名、女十名、合計二十九名。（小学生二十一名、中学生八名）

⑥講 師 五 名。（男 四名、女 一名）

⑦主な内容 勤行式指導、開講式、生活及び日程オリエンテーション、仮面劇「ざ・だんま」鑑賞、勤行、作務、講義「智積院について」、山内巡拝、山内オリエンテーリング、勤行式の解説、讚仏歌の練習、ビデオ鑑賞、レクリエーション、発心式、閉講式。

●平成二年度寺院子弟講習会

①日 時 八月一日、二日、三日（二泊三日）

②から④までは、前年と同じ。

⑤参加人員 男十八名、女九名、合計二十七名。（小学生十三名、中学生十四名）

⑥講 師 五 名。（男 四名、女 一名）

⑦主な内容 勤行式指導、開講式、生活及び日程オリエンテーション、レクリエーション、勤行、作務、講義

「弘法大師、興教大師について」、山内巡回、山内オリエンテーリング、讃仏歌の練習、発心式、地域別懇親会、泉涌寺参拝、クラフト活動、感想文、閉講式。

● 平成三年度寺院子弟講習会

①日 時 七月二十八日、二十九日、三十日（二泊三日）

②から④までは、前年と同じ。

⑤参加人員 男十一名、女九名、合計二十名。（小学生八名、中学生十二名）

⑥講 師 五 名。（男 四名、女 一名）

⑦主な内容 勤行式指導、開講式、生活及び日程オリエンテーション、レクリエーション、勤行、作務、ビデオフォーラム、山内巡回、京都史跡巡り、讃仏歌練習、発心式、地域別話し合い、清水寺参拝、クラフト活動、感想文記載、閉講式。

寺院子弟講習会の展望

* 寺院子弟講習会の在り方についての一考察

宗団において「寺院子弟講習会」開催は七回を数えるに至った。その間延べ百七十九名が講習を修了した。内訳を見ると小学生百十三名、中学生六十六名、男女比は男百二十八名、女五十一名となっている。しかし、この二年間の参加状況を見ると、中学生の参加が小学生を上回り、女子の参加者も増えつつある。また、講習会に二回以上參加した子弟の比率や得度済者の参加も増える傾向にある。以上を踏まえると、当該事業の「総本山に登嶺し、本山の霧氷に親しみ、宗教情操を深める」という開催目的は達成されたと見られる。しかしながら、新たに参加する子弟を

見ると、初めて智山勤行式を手にする子弟のほうが多いように感じられる。ある引率された教師が、「講習会参加が決まってから、子供を本堂に連れていくて、お経を少しずつ教えるようになりました。なかなか大義名分がないときつかけがつかめなくて」と話されていたが、後継者養成が世襲化しつつある中での、子弟教育の実態を表わしている話のようにも思える。

本派における子弟教育は、昭和五十一年一月二十八日に教化研究所より宗団に提出された「子弟教育に関する答申書」がその骨子になっていると思われる。その中の寺庭教育の目的と運用の項目では、幼児期における家庭教育の重要性、特に母親の果たすべき役割の大きさが述べられている。しかし、青少年教育全体を見渡すと、家庭と地域社会の教育力の低下が問題とされ、家庭のもつ形成力、社会のもつ形成力の回復が真剣に討議され、検討されているのが現状である。

答申書では、幼児期の教科課程・小学生の教科課程は『自坊』となっているが、寺庭婦人が、あるいは教師が、カリキュラムの内容に添つて教えることが出来るかどうか、また内容に添つた教材・教具があるか、教育に関して適切な指導助言を与えられる支援態勢は整っているのかなど、細部についてはまだまだ検討すべき課題があるよう思える。

前述した事項を踏まえ、少年期（子弟初期）教育の在り方について私見をまとめてみると、

①望まれる教師像の確立

教育には理念が必要である。なにを目指して教え育むのかの「何」が見えなければ教えようがない。本派教師として、真言行者としての在り方論を確立し、関係者全てが教師像について共通理解を持つ事が必要と思われる。

②発達課題に応じた教育カリキュラムの作成

「馬に水を飲ませたいが、馬は飲まない。ここをおいてはもう水場がない困った。しばらく立たずんでもいると、通りがかりの人がポケットから塩を出して馬に与えた。馬は美味しそうに水を飲んだ。」と言う逸話がある。人には「学習適時性」がある事は前述通りである。各個人が学習できる時期と教師が教えなければならない時期が一致しなければ教育効果は上がらない。「発達と教育」のバランスに立脚した教育カリキュラムの作成が必要と思われる。

③長期研修計画の作成

「人は生涯にわたり学ぶ」時代になっている。また、高学歴社会は、寺院・僧侶に対するニーズの多様化となつて現れている。この様な状況に対応するためには教育カリキュラムに基づく一貫性のある長期研修計画策定と実施が必要である。特に、幼児・小学生期教育を担当する教師や寺庭婦人への教育と指導助言は課題の重要性からみて、丁寧に実施されるべきである。

④研修プログラムに基づく指導書の作成

「自坊」で実施される幼児期および小学生期については、教育効果の非常に大きい時期であるが、円滑な研修を可能にするためには、研修プログラムをどの様に教えるか、また教材は何かなどを解説した指導書の作成が必要と思われる。

⑤教材教具の開発と設備

青少年の気質はマスメディアの発達と共に感性的、直観的になつてきている。気質の是非を問う前に、対象者に受け入れられる教材教具を整えることは、教育効果を高める上で大切である。特にビデオなど視聴覚教材の整備は急務とされる。

⑥開催方法の整備

今日の青少年の意識と少年期（子弟初期）教育の在り方についての一考察

現在、本派主催の寺院子弟講習会は総本山開催のみである。しかし、初期研修においては、生活・地理的環境の同一者が心を開いて仲間意識を培い、自己研鑽に励む事がより効果的である。また、遠隔地寺院では引率しなければならず参加できない、との声も聞く。

以上の状況を踏まえ、複数会場開催や、既成開催の教区子弟講習会への人的・資金的援助をすることにより本派主催講習会とし、近隣教区の参加を促すなど、「寺院子弟は最低一度は参加できる」体制の確立を目指すことも必要と思われる。

⑦情報サービス・指導センターなど研修支援態勢の確立

次代を担う子弟教育・研修は宗教教団を左右すると言つても過言ではない。教育を蔑ろにした国家は滅亡を早める事は歴史が証明している。本派においては残念ながら教区子弟講習会を開催している教区が多いとは聞かない。子弟講習会の重要性、効果などをデータサービスや資料の提供をしながら普及啓発し、また、温習会など寺院活動に対しても適切に指導助言を与えられる支援体制の確立は急務である。

以上、私見を列記した。

事業の合否は、集団の構成員がその事業を温かく見守ることが出来るか否かにかかっていると言われる。事業を遂行するに当たっては、集団の構成員に開催趣旨の徹底した理解を得る努力と啓発に勤め、一体感を深めることが出来た時点で八〇%成功したと言われる。

* 檀信徒子弟講習会への展望

「宗教法人はなぜ非課税なのか」とよく問われる。「それは、国家以上に国民に夢と安らぎと活力を与える事が宗教

法人には出来るから」と、答えることにしている。

二十一世紀は宗教の時代と言われる。世界を見渡しても思想的対立は影を潜め、民族と宗教対立に起因する紛争が目につく。テレビを見ていても、宗教を話題にした番組を見ない日はない。マスメディアが条件を整え、宗教は国民的関心事となっている。檀信徒教化を考える上で最も期が熟した時であると思われる。

檀信徒子弟講習会開催にあたっては、特に少年期講習会については寺院子弟講習会と同じ内容で支障はないと思われる。開催会場については「菩提寺」での開催がより効果的と思われる。実施留意点・内容についてまとめる。①「菩提寺」意識を育む→お寺の名前も、宗旨も、坊さんも知らないなどの話を聞く事がある。将来の後援者に強く帰属意識をもつてもらう事に勤める。②宗教体験を通して宗教的情操心を育む→行を経験することにより、いたわりや思いやり、感謝などの気持ちを再確認する。③作務など作業を通して社会参加を考える→人はひとりでは生活できない。お互いの協力のもと生かし合うことの大切さを学ぶ。④自立体験を育む→自分のことは自分ですることの大切さを習得させ、アイデンティティ確立の手助けをする。以上を配慮しながら計画する必要があろう。

まとめ

「子供は生き物である。社会も生き物である。従つてプログラムは相対的なものである」との理解にたつて、私達は青少年をとらえなければならない。古定概念をもち、相手に押しつけることは、摩擦と苦痛を伴なう。そこには、豊かな情操と人間性に支えられた教師は生まれてこない。

少年期（子弟初期）教育の最大の目的は、生涯学習意欲と生涯学習能力の形成にある。言い換えれば、各人が生涯にわたって、自発的・自立的に学ぶ姿勢を確立することである。その為には、家庭での指導援助が必要不可欠とな

る。子供を学習させたければ、先ず親が率先垂範、学習すべきである。アメリカの教育学者ハヴィガーストは「恐らく、父親あるいは母親のできる最も有効かつ重要な事柄は、少年達がそれに従うに倣するだけの模範を与える事であろう。」といつてゐる事は非常に的を得た表現に思われる。

教師と親の両立と、後ろ姿こそが少年期（子弟初期）教育の合否を握っていると言つても過言ではない。

参考文献

- 「生涯教育のアイデンティティ」エットレー・ジエルビ、海老原治善編（エイデル研究所）
「アイデンティティ」小此木啓吾（至文堂）
「遊びの心理学」J・ピアシ（黎明書房）
「地域の復権」松原治郎（学陽書房）
「日本青年の意識構造」松原治郎（弘文堂）
「子ども時代を失った子どもたち」マリー・ワイン（サイマル出版会）
- 「分化のなかの子ども」袁浦康子（東京大学出版会）
「子どもの生活圈」一番ヶ瀬康子他（日本放送出版協会）
「現代社会と青少年」（総務厅青少年対策本部編）
「青少年の友人関係」（同）
「エミール」ルソー（岩波書店）
「生涯学習時代の学校」今里仁（学習研究社）
「生徒指導の手引き」（文部省編）
「小学校指導資料」（文部省編）
「智山教化研究」（智山教化研究所）
「これからの寺院行事」（真言宗智山派宗務厅）